

東京地方連合 連合のつどい
23/11/21

コロナ禍とそれ以後の宣教的課題

日本の精神風土と教会の対応から考える

石田 学

日本ナザレン神学校教授、小山ナザレン教会牧師

1. 福島原発事故とコロナ禍が顕わにしたもの わたしたちは何を恐れたのか

a) 日本における宗教性の特徴を顕わにした二つの出来事

- ・ 福島第一原子力発電所の事故
- ・ 新型コロナウイルスの感染拡大

この二つに、わたしたちは何を見たか → 二つの恐れ

- ・ 見えないもの・異質なもの（穢れの原因）への恐れ
- ・ 周囲の目に対する恐れ

1) 放射能への恐れ：福島原発事故が顕在化させたもの

- 見えないものへの恐れ＝穢れることへの恐れ
古代から「穢れ、祟り」への恐れは人々の間に存在してきた。
- 現代世界において見えないものへの恐れがもっともはっきりと意識されたのは、福島第一原子力発電所の事故による放射能への恐れであろう。
- 目に見えないものへの恐れが、現代科学によって解消されるよりもむしろ、現代科学技術の産物である膨大な量の放射能という、目に見えない新たな穢れの源によって具現化した。

穢れを恐れる日本社会の宗教的特質が顕わにされた。

日本の精神風土に浸透している穢れへの恐れが、放射能によって穢れた人から穢れがうつるのではないかという恐れを生み、嫌悪、いじめ、差別となったことは、2017年のNHK「クローズアップ現代」がおこなったアンケートの自由記述欄の書き込みからも推測できる。子どもたちに対するアンケートへの自由記述は、「放射能がうつる。賠償金をいっぱいもらってるんだから、おごれ（と言われた）」「無視され高校を転校した」「首をしめられる。親を拒否していて、何も話せない」などと記されていた。大人へのアンケート自由記述欄には「電車で福島避難のパンフレットを読んでいた時男の人に貴女たちは俺たちの税金で暮らしてんだよなーと声をかけられた。心がふるえました。」（90代女性）、「パート職場で福島出身と言えば『えーじゃあ浴びちゃったの〜？』一時帰宅をすると言えば『放射能持って帰って来るなよ！！』（と言われ）その職場は続けられずやめました。」（50代女性）などの記述が見られる（www.nhk.or.jp/gendai/kiji/029/）。見えない「放射能」への恐れが、被災地からの避難者という見える存在と結び付けられて、その人を穢れの対象とみなして嫌悪と警戒を抱き、いじめと差別を生んだことがはっきりと見て取れる。

もともと人々の意識の内に存在していた、目に見えないものによる穢れへの恐れが、現代科学によって解消されるどころか、逆に、現代科学技術が生み出した莫大な量の放射能という、目に見えない新たな恐れによって具現化した。

2) 新型コロナウイルスへの恐れ：異質なもののへの恐怖 穢れに対する日本の宗教性の特質を明らかにした

コロナ禍の時代に入々は何を見つめたか：

見えないもののへの恐れが、新型コロナウイルスによって現実

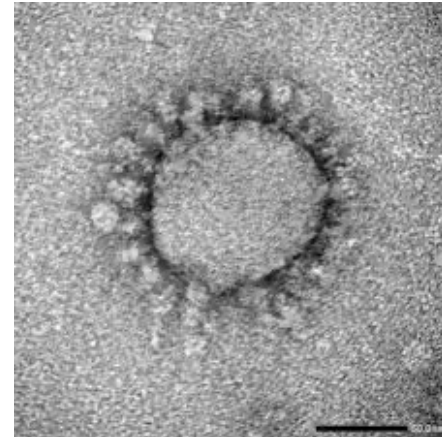
- コンピュータ・グラフィックによる見えないものの可視化



形は見せられるが実物は見えない



存在を否定できない → あるかも



- コロナウイルスという穢れへの恐れを生む異質なもののへの恐れ
見えないものの可視化としての感染者

- 日本社会の場合、異質性に対する不安、警戒、憎悪は民族的・文化的多元社会においてよりもはるかに大きい。医療人類学者磯野真穂は朝日新聞デジタル版の2020年5月8日の記事「コロナ後の世界を語る 恐怖と正しさが生む『村八分』」で次のように述べる。

「新型コロナの感染者数や死者数、予想のグラフを私たちは今、メディアを通じて毎日のように見えています。さらに、専門家は『あなたの無責任な行動が誰かの命を奪うかもしれない』と警鐘を鳴らす。新型コロナ感染のリスク管理を徹底的に追求する社会。それが今、私たちの暮らす社会です。・・・政治家も専門家も報道も、見えないもの、存在するかどうか不確かなものへの恐怖を抱くように教育し続けている。それが現実かどうかはさておいて。」

（赤字化は石田による）

別実染なく感視
判現感質スは可
をう、異リいを
かいんうるス
うとろいれアル
どいちとさ者イ
かなもスと染ウ
るがは尔的感る
いう者イ標、あ
てよ染ウのはで
「し感型悪由在
れのス新憎理存
穢処ル、とるい
「対イは悪きな
てかウ人嫌起え
しし。た、が見
着るるれり悪、
付すいわあ憎は、
が毒で思でと人
ス消れと在悪る。
ルらるる存嫌れあ
イすせあのたさで
ウたさが威しなら
がひえ性脅うみか
物だ怯能たそとだ
やたは可び。る在
人、々る帯るい存
のず人いをまてた
困き、ての高し
周でにしもが染化

がすや別
性要に判差
能、形批は
可はるのい
の撃ええる
染攻見ゆあ
感判うと
び批いこれ、
よのとのさ
おへ人そな
(者、で
者染が合名
染感ス場匿
感。ルのる
のるイ抵よ
そえウ大に
、見いてどる。
がになしなれ
い目えそSさ
いは見。N現
なは見。N現
え)るるS表
見人ああはで
はたでで現形
体対象ら表う
自さ対かのい
ス断のる悪と
ル判れい憎め
イと恐て、じ
ウるにつ悪い
あるな嫌や

きよめの儀式としての建物に入る毎の消毒、手洗い、消毒
明らかになったことは、日本における脱宗教化は、脱既成
宗教であり、日本における穢れときよめの宗教性は、強く
人々の間に根付き、今も浸透しているという事実である。

b) 日本の教会はどう対応したか

①歴史的背景

- 古代教会から、キリスト教徒が苦境にある人々を支えてきたことは、多くの文献から明らかである。殉教者ユスティノスは『第一弁明』67.6-7で次のように述べている。

「次に生活にゆとりがあっても志ある者は、それぞれが善しとする基準に従って定めたものを施します。こうして集まった金品は指導者のもとに保管され、指導者は自分で孤児ややもめ、病気その他の理由で困っている人々、獄中につながれている人々、異郷の生活にある外国人のために扶助します。要するに彼はすべて窮乏している者の世話をするのです」。（『キリスト教教父著作集1 ユスティノス』教文館、p.85）

四世紀のローマ皇帝フラウィウス・クラウディウス・ユリアヌス（背教者）は、彼の手紙（Ep.84、R. M. Grantの引用による）の中で「あのガリラヤ人らは彼らの中の貧しい者だけでなく、我々の（貧しい者）をも助けている」と嘆いている。これが古代からキリスト教徒の歩んだ生き方であり、それが迫害の時代にあっても多くの人々をキリスト教に導いた理由の一つであった。ロドニー・スタークは『キリスト教とローマ帝国』（新教、2014年）で、二世紀と三世紀にローマ世界を襲った二つの疫病のさなかに、キリスト教徒が「社会的にも霊的にも対応する能力を発揮し、裕福な異教徒や異教の神官らが感染地域から逃げ出し、病人を見捨てたのに対し、キリスト教徒はそこにとどまり、異教徒の看護をおこなった」ことが、結果としてキリスト教徒の増加をもたらしたと結論付けている。（pp.95-124）。

こうした働きは古代教会に限らず、中世から近代にかけても教会によって常に担われてきた。教会の社会貢献がキリスト教の拡がりに大きな力となったことは、世界宣教の歴史をとおしても明らかである。

②新型コロナウイルス禍の場合

教会が現在直面している新型コロナウイルス禍が、教会と教会の宣教の働きに突きつけている課題：

結論から述べると、わたしたちは現代のコロナ禍に際して、過去の経験がほとんど役に立たず、むしろ相反する現実直面させられていると考えざるを得ない。

過去には、そのように意図して活動したわけではないにしても、キリスト教徒が非キリスト教徒の看護を担い、苦境にある人々を支えたことがキリスト教への好意を生み、キリスト教徒の増加をもたらした。現代のコロナ禍の場合、二つのことを考えねばならない。第一に、教会の歴史的体験とは異なり、現代社会においては、キリスト教系の病院や施設の働きを別にすると、教会および教会の信徒が看護などの活動に関わる余地がほぼないこと、第二に、教会そのものが感染源となることへの警戒と非難が起きるという現実直面していること。

③教会は具体的にどう対応してきたか

日本においてコロナ禍のはじめから「三密」を避けることが強調されてきたことは、教会を当事者の立場へと追い込んだ。教会の集会は、それ自体がいわゆる「三密」なのだから。その結果、教会で礼拝をはじめ集会を続けることへの危惧・不安が、教会の内部に広がった。教会での集会は日本では直接名指しされることは少なかったものの、海外で起きた教会でのクラスターが大きくニュースで報道された。その結果、日本では必然的に集団での集会行為、つまり三密の典型として警戒された。

栃木県小山市のわたしの教会でも、市街地からはずれた教会会員ほど、近隣住民の目を気にして、あるいは直接近隣住民に警告されて、教会への出席を控える人が出て来た。出席出来なくなったというのが本当のところであった。

1) 礼拝の自粛

多くの教会が、新型コロナウイルス対策として、礼拝を中止し、あるいは縮小・様式の変更をおこなった。ほとんどの教会は、礼拝が教会にとって本質的なことであるとの認識を、礼拝自粛についての説明の中で示している。それにもかかわらず、なぜ礼拝を中止するのか。その根底には「見えないものへの恐れ」があることは最初に述べた。そこに存在するかもしれない新型コロナウイルスへの恐れは、ひとつには自分たちにも感染リスクがあることであり、もうひとつは社会的迷惑の原因となることであろう。

山口隆康は東神大パンフレット42『コロナパンデミックの中の教会形成』（東京神学大学出版委員会、2020年）において、隣人への配慮に基づく「愛の自由な行為」として礼拝自粛を位置付ける。

山口氏の主張には、わたしも賛同する。だが、礼拝の自粛と
いう決断の背後には、隣人への愛とは別に分けて考えなければ
ならない動機として、周囲の批判を恐れるということがある。
るのではないだろうか。両者を明確に分けることは困難である。
しかし、「周囲への配慮」で礼拝を自粛することは、将来に
禍根を残すことになる可能性をはらんでいる。周囲の批判や
敵視に教会がさらされる原因が、今回は新型コロナウイルス
だが、将来何が理由になるかはわからないからである。戦
前・戦中のような事態が起きないとは言えず、その可能性は
むしろ年々高まっている。周囲への配慮を理由に礼拝の自
粛・中止をおこなうことは、将来的に別の理由で同様の判断
をする先例ともなり得ることを、今の時代にわたしたちは
しっかりと見すえておく必要がある。

多くの教会が選択した、礼拝の出席者人数を制限して、複
数回に分散しておこなう方法は、礼拝を中止しないための現
実的で有効な方法であろう。

2) 礼拝のオンライン化：そのメリットとデメリット

多くの教会のとったもう一つの対策は、礼拝のオンライン化。

メリット：オンライン化することで、コロナ禍のためだけでなく、それまであまり意識してこなかった教会員、特に病気や身体的制約のために教会に集うことのできない人たちが、オンライン化することで礼拝に参加できるようになったことは事実であり、それは大きな収穫であった。オンライン化が教会に新たな伝道・牧会の可能性を拓いたことは間違いない。

デメリット：オンライン礼拝の場合、画面に映るのは司式者と聖職者だけということが大半である。オンライン礼拝の参加者はむしろ「観客」に近い。その礼拝に、はたして教会の本質である共同体性は成り立つのであろうか。

牧師を除き、会衆の顔を映すことは、本人の承諾なしにはおこなうことができない。

礼拝が神とわたし、あるいは聖職者である教師とわたし、という一対一の対応の集合体であると考えらるなら、聖職者だけが映し出される配信を礼拝とみなすこともあり得る。こうした礼拝理解の場合、共に賛美し共に詩編を唱和することは、礼拝にとって付属的あるいは二義的なものと見なされる。礼拝の中心は説教を聴くことだと考えるなら、オンラインによる聖職者と視聴者の一対一で礼拝が成立することになる。

オンラインによる礼拝配信は、礼拝とは説教のことだという印象を一段と強めることになる。ここに礼拝のオンライン化の大きな課題があるのではないか。

もし、礼拝は「教会共同体が目に見える形で立ち現れる時」であるとするなら、オンラインで配信された礼拝は、あくまで共同体としての礼拝に参加できない場合の、一時的な代替措置であり補完的なものだとの認識が、聖職者にも信徒にも共有されていることが必要であろう。

そのことを把握していれば、礼拝のオンライン配信は、補完的な働きをするという意味で、なにもしないよりはよいと考える。

問題は、オンライン配信の技術や機材、配信の質にこだわり、視聴者数の多さを追求して喜ぶあまり、オンライン礼拝が限定的な役割を果たすべきものだということを見落としてしまうことにある。

c) オンライン化の課題と未来の可能性

①礼拝のかたちと意味の変化を考える

- ・説教中心の礼拝に（典礼刷新の流れが無に帰する心配）
賛美、聖餐が（不可能ではないが）困難
礼拝の劇場化
- ・共同体性の希薄化（ミニ・テレヴァンジェリスト化）
匿名性の高い参加者、
共に喜び、共に泣くことの欠如（人間関係の希薄化）
交わりとは相容れない特質（個人のプライバシー保護）

オンライン化の現実、そしてその恒常化の流れは変わらない。
こうした課題を理解した上で、オンライン化に取り組むべき

②オンライン礼拝から、オンライン教会へ

教会のオンライン化は時代の必然的趨勢：避けられない未来の現実
仮想教会構築（メタヴァースMETaverse）の可能性

利点

- ・地球規模で参加・信仰的交わりが可能
- ・無牧、過疎地の教会への対応方法として有効
- ・従来の教会に加わる可能性が低い人たちに開かれる可能性

難点

- ・ある程度の技術と知識、防御策が必要
- ・アバター（仮想分身）でどこまで共同体性を実感できるか不明
- ・問題のある仮想教会・擬似教会が多数出現する可能性

しかし、時代を見つめてゆくと、将来的には現実になるに違いない